

第5回講義 (20141107)

第1章 問答の観点からの言語行為論

§1 発語内行為の分類

§2 質問の発語内行為の特殊性

§3 言語行為はなぜ成立するのか? (言語行為は、問答の中で成立することを論証したかったのですが、未完です。)

第2章 質問以外の言明は、問いに対する答として成立することの証明 (焦点論からの証明)

コリングウッド・テーゼの証明 (焦点論からの証明)

(参照: 'A Proof of Collingwood's Thesis' in *Philosophia Osaka*, Nr. 4, Published by Philosophy and History of Philosophy / Studies on Modern Thought and Culture Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, Osaka University, pp. 69-83, 2009/3)

1, コリングウッド・テーゼの説明

コリングウッド (R. G. Collingwood, 1889-1943) は、『自伝』で次のように主張している。

「[ひとが語ったことの]意味を見いだすためには、彼が語ったり書いたりしたことがどのような質問 (彼の心の中の質問、そして彼によってあなたの心の中にあると想定されていた質問) への答えとして意味されていたのかを知る必要がある。」¹

彼の『形而上学に関するエッセイ』(1940)では、次のように述べている。「誰かによって行われる言明はすべて、質問に答えることとして行なわれる。」² 我々は、彼のこれらの主張を次のテーゼで表現できるだろう。このテーゼをコリングウッド・テーゼ (CT) と呼ぶことしたい。

CT 「(質問以外の)すべての言明は、それが答えとなる質問 (相関質問) への関係においてのみ意味を持つ」

彼はこのようなテーゼを主張していただけでなく、その重要性についても明確に認識していた。これを出発点にして彼は、例えば、二つの言明が矛盾するのは、それが同一の問に対する答えとして語られるときであるという。(この指摘からは、問答論理学の必要性が帰結する。) このように、CTは哲学の多くの領域で重要な帰結をもたらす重要なものである(その幾つかを後論する)。しかしコリングウッドはこれの厳密な証明を与えていないように思われるので、まずCTの厳密な証明をおこないたい。

ちなみに、このテーゼは、まだ曖昧かもしれない。このテーゼは、「すべての言明が、問いに対する答えとして発生している」と主張しているのではない。CTの主張は、「すべての言明は、問いに対する答えと

¹ R. G. Collingwood, *An Autobiography*, Clarendon Press Oxford, 1978, p. 31.

² R. G. Collingwood, *An Essay on Metaphysics*, Clarendon Press Oxford, 1998, p. 23. Gadamar は、「問答の論理学」というコリングウッドのアイデアに言及して、それを基礎にして解釈学の方法を展開した。 Cf. Hans-Georg Gadamar, 'Wahrheit und Methode', the 4. edition, J. C. B. Mohr Tuebingen, 1975, pp. 351-360.)

して理解するときのみ、理解可能である」と主張している。私たちは、機械的な操作によって、文法的に正しい文を作ることができる。たとえば、文法に従って語を結合したり、あるいは、すでにある有意味な文の一部を、他の語と置き換えたりすることによってである。このようにして、文法的に正しい文を作るときには、私たちは問に対する答えとして文を作成したのではない。しかし、そのようにして作られた文であっても、その文の意味を理解するためには、私たちはそれを何らかの問いの答えとして理解する必要がある、というのが、CTの主張である。

2 「焦点」の観点からのCTの証明

この証明は、次の二つのテーゼの証明にもとづく。

テーゼ1 「焦点は、すべての言明の意味の本質的な構成要素である」

テーゼ2 「焦点の位置は、質問と答えの関係によって決定される」

テーゼ1の証明にとりかかる前に、「焦点」について説明しておきたい。

(1) 焦点とは何か

文は、一語文を除くと、普通は多くの語から出来ている。文を構成する多くの語の関係は、統語論的 (syntagmatic) と呼ばれる。例えば、英語の SVC とか SVOC というような関係である。他方で、文を構成する名詞や動詞は、それぞれ同種の類似の語との関係の中で意味をもつ。例えば、色を表す様々な語「赤」「青」「黄色」「緑」などの関係である。この関係は、パラダイムの (paradigmatic) と呼ばれる。我々が、文を作るためにパラダイムの関係にある同種の多くの語の中から一つの語を選択するとき、我々はそれを「他でもなくこれ」というような仕方を選択する。「SはPである」という文の場合に、SもPも「他でもなくこれ」という仕方を選択されている。しかし我々は文を構成するすべての語のこのような選択性を意識することは出来ない。我々は一つの語ないし句の選択性だけを意識できる。二つないしそれ以上の語についてその選択性を同時に意識しようとすることは大変複雑な努力を必要とする。そして我々がたとえそのような努力によって二つの語の選択性を意識するとしても、我々はそれらを同時に意識することはできず、それらを順番に意識しなければならない。これは、ゲシュタルトの知覚における地と図の構造に似ている。たとえば、有名なウサギとアヒルの反転図形の場合、我々はそれをウサギとして見ると同時にアヒルとして見ることは出来ない。焦点の場合もこれと同様である。例えば「リンゴが赤い」という言明の場合に、「桃でも、オレンジでも、ナシでもなく、他でもなく）リンゴが、赤い」というように「リンゴ」に焦点をおいて理解することも出来るし、また「リンゴは、(青でもなく、黄色でもなく、緑でもなく、他でもなく) 赤い」というように「赤い」に焦点をおいて理解することもできる。しかし我々はこれらの二箇所と同時に焦点をおいて理解することはできない。

以下で証明したいことは、我々が文を発話するとき、我々はそのどこかに焦点をおいているという心理学的な事実ではなくて、我々が文のどこかに焦点をおかなければ、しかもただ一か所に焦点をおかなければならないことを、意味論的な事実、つまり文の発話が意味を持つための条件として示すことである。

もし主語と述語を同時に選択したとすると、それは複数の文の中から一つの文を選択しているのである。そのときには、「他でもなく文 p は、・・・である」とか「・・・は、他でもなく文 p である」のような発話が行われることになるだろう。ここで副文について言及しておきたい。

「彼は、カントが啓蒙主義者であることに反対している」

この文は、「彼」や「反対している」に焦点をおいて理解することもできるが、「カントが啓蒙主義者であること」という副文に焦点を置いて理解することもできる。その時には、「彼は、(他でもなく) p に反対している」のように、副文の全体に焦点が置かれており、複数の文の中から p が選択されているといえるだろう。

この選択においては、副文の主語と述語は同時に選択されているといえるだろう。しかし、この場合にも、副文「カントが啓蒙主義者である」の理解は、どこに焦点を置くかによって変化する。また、我々はそのなかの一箇所に焦点をおいて理解することしかできない。

焦点は、このような理由によって、一つの言明の中の一箇所だけに置かれる。こうして「SはPである」という文は、二つの仕方で理解可能である。一つは「S」に焦点が置かれて、「(他でもなく) SがPである」と理解される場合であり、もう一つは、「P」に焦点が置かれて、「Sは(他でもなく) Pである」と理解される場合である。(実は、この焦点の位置と「は」と「が」の使い分けの問題は関連しており、これについて後述する。)

(2) 「焦点」と他の類似の概念との違い

ここでは、「焦点」の概念をより明確にしておくために、他の類似の概念と「焦点」との違いを説明したい。

(a) Theme と Rheme の区別 (Prague School)

「主題部」(theme) は、「叙述部」(rheme) に対立する概念である。それは、文頭に置かれる要素のことである。(Yoshihiko Ikegami, *Semantics*, Taisyukan Syoten, 1974, p. 340, M. A. K. Halliday, 'Functional Diversity in Language as Seen from a Consideration of Modality and Mood in English,' *Foundation of Language*, 6.) しかし、「焦点」は常に文頭に置かれるわけではない。この点で「焦点」と「主題」は異なる。

首相は、衆議院を解散した。

<主題部> <叙述部>

衆議院は、首相によって解散された。

<主題部> <叙述部>

(b) 新情報と既知情報の区別

文の内容は、文脈上、既知情報と新情報に分かれる。(注5)

「誰が、asa400のフィルムを買いましたか」

「彼が、asa400のフィルムを買いました」

この文の内容は、つぎのような既知情報と新情報に分かれる

「彼が、asa400のフィルムを買いました」

<新情報> <既知情報>

先の主題部と叙述部の区別と、新情報と既知情報の区別は異なる。新情報は、主題部にも叙述部にも登場するからである。次のような問答では、叙述部の方が新情報となる。

「彼は、何を買いましたか」

「彼は、asa400のフィルムを買いました」

既知情報 <新情報> 既知情報

ちなみに、新情報と既知情報に分かれる文は、主張文にかぎらない。約束や命令の発話文も、問いに対する答であるときには、このようにわかることができる。

「何をおもとめですか」

「asa400のフィルムをください」

<新情報> <既知情報>

チョムスキーは、既知情報と新情報の区別を、「前提」presupposition と「焦点」focus とよぶ。(注6)

Is it JOHN who writes poetry?

It isn't JOHN who writes poetry?

No, it is BILL who writes poetry.

普通のイントネーションでは、大文字の語が、主強勢をうけ、ピッチ曲線の最大抑揚点となる。これらの

JOHN,BILL は、焦点であり、その文は、誰かが詩を書くことを前提としている。チョムスキーは焦点の区別を次のように説明している。(注7)

Bill likes JOHN.

BILL likes John.

これらの文の焦点の区別は、次のように表示される。

the x such that Bill likes x -- is John

(ビルが x を好きであるような x は、ジョンだ)

the x such that x likes John -- is Bill

(x がジョンを好きであるような x は、ビルだ)

この二つは、次の日本語の表現に、近いと思われる。

「ビルが好きなのは、他でもなくジョンだ」

「他でもなくビルが、ジョンを好きである」

チョムスキーの焦点もまた、文のある構成部分のパラダイム関係に注目している箇所のことであると思われる。チョムスキーがいうように、新情報と旧情報とは、焦点と前提の箇所と一致するだろうが、しかし、これらは厳密には区別されるべき概念である。新情報と旧情報とは、コンテクストに依存した語用論上の概念であり、後者は一つの発話の意味の内部構造に関する、意味論上の概念である。すべての発話は、焦点と前提の区別を持つが、すべての発話が新情報と旧情報の区別をもつとは限らない。たとえば、確認のための発話「では、(他でもなく) 明日お会いしましょう」において、「明日」に焦点があるが、これは新情報ではない。

新情報と既情報の区別は文脈に依存している。それゆえに、これは文の意味にとって偶然的につけられた弁別であるように見え、文の意味の内的構造に本質的なものは見えない。そして、焦点と前提の区別は、確かに多くの場合、新情報と既情報の区別と実質的には一致している。それゆえにひとは、新情報と既情報の区別が文の意味にとって偶然的であるように、焦点と前提の区別もまた文の意味にとって偶然的であると思うかもしれない。しかし、それは事実ではない。我々はそれを以下に証明しよう。

付注： 「は」と「が」の用法

「は」と「が」の使い分けは、幼児でもできるのだが、しかしその使い分けの規則については、いまだに定説といえるものがないようである。以下では、蛇足になることをおそれつつも、焦点との関係に注目して、一つの仮説を提案したい。

「が」は未知の語を承け、「は」は既知の語を承ける、という説がある。ここでいう、未知の語と既知の語は、先の新情報と既知情報の区別とおなじであろう。

「sが、pである」

新情報 既知情報

この文の「s」が新情報であるならば、「pである」は既知情報であることになるだろう。

「sは、pである」

既知情報 新情報

この文の「s」が既知情報ならば、「pである」が新情報であることになるだろう。ところで、この説の欠点は、山田みどりによれば、次の二点である。³

1、「が」は既知のものをも承ける場合がある。例えば、「今泣いたカラスが、もう笑った」において、「今泣いたカラス」は、話し手も聞き手も承知している人物であると言えよう。

2、既知と未知の区別のみでは、従属節中に「は」を使えない節があることの説明がつかない。主語節・

³ 山田みどり「助詞」(『研究資料日本文法 5』明治書院、所収)

連体修飾語節中では、「が」のみが使われる。たとえば、「海が一番穏やかなのは七月でしょう」「私が出かけようとする時に彼がやってきた」

1の批判に関しては、久野あきらによる anaphoricity と新情報との区別についての次の指摘によって反論できるだろう。

「与えられた構成要素が、その文の中で新しいインフォメーションを表すか、古いインフォメーションを表すかという概念は、その構成要素が指す事物がすでに話題にのぼったことがあるか否かという概念 (anaphoricity) とは別のものである。」⁴

しかし、2の批判に答える事ができない。そこで、私は次のような修正を提案したい。新情報と既知情報の区別と、焦点と前提の区別は、前者が語用論上の区別であり、後者が意味論上の区別であり、異種のものであるが、新情報と焦点の位置が一致することが指摘されている。文を発話する時の意図は、新情報を伝えようとするにあるといえるだろうから、当然そこに焦点がくるのである。そうすると、上の未知/既知説は、つぎのように言い換える事ができるだろう。「が」は焦点を表示し、「は」は前提を表示する。しかし、このままでは、やはり従属節中では、「は」がほとんど使用されないことを説明できないので、これをさらに次のように修正して、焦点説と呼ぶことにしたい。

焦点説：「は」は、文(ないし節)の後続部分のどこかに焦点があることを示し、「が」は、文(ないし節)の後続部分のどこにも焦点がないことを示す。

これによって、2の批判に関しては、次のように答えることができるのではないだろうか。「は」は、後に続く部分に焦点があたることを表示するものであり、複文中の従属節には、焦点があたらないので、「は」をもちいることができないのである。「が」は、その前の部分に焦点があることを表示するのではなくて、むしろ後続部分に焦点がないことを表示するのだとすれば、従属節中に「が」が用いられることをうまく説明できる。従属節の中に焦点がおかれることがないということは、次のように説明できるだろう。その理由は、もし従属節中の一部に複文全体の焦点を起きたいのならば、そのことは、本来的には従属節ではなくて、主文として語られるべきである、ということであろう。もし、従属節中の一部に焦点が置かれても不自然にならないのだとすれば、それは「従属度の低い従属節」の場合に限られるだろう。そして、この予測は、「従属度の低い従属節の場合」には、「は」も「が」も使われることがある、という指摘と一致する⁵。そのような従属節としては、引用節の「・・・と」、接続節の「・・・けれど」「・・・が」など、理由節の「・・・から」「・・・ので」「・・・のに」など、の例が指摘されている。

「雨がふっている」という文の場合には、「雨が」の後続部分に、焦点がないとすれば、「雨」に焦点があることになる。「ぼくは、花子が好きだ」という文では、「ぼくは」の後続部分に、焦点があって、しかも、「花子が」の後続部分に焦点がないとすれば、「花子」に焦点があることになる。

「彼は逮捕されませんでした」とは言えるが、「彼が逮捕されませんでした」ということは不自然な感じがする。なぜだろうか。おそらくは、否定文の場合には、焦点は否定にあることが多いために、「彼が」とすると、それに続く部分には焦点がないことを示すことになり、矛盾するよう感じられるのである。

つぎのような例も、「は」は、後続部分に焦点があることを示しているという仮説と一致するのではないだろうか。「そこへいくな」「寒くハない」「行くことハ行く」「うかうかハできない」「中学生としてハ立派」⁶

(3) テーゼ1の証明

⁴久野あきら『日本文法研究』大修館書店、1973、p.209)

⁵野田尚史「ハとガ」、宮島達夫、仁田義雄編『日本語類義表現の文法(上)』くろしお出版、1995年、p.281。

⁶この用例は、坂野信彦「ハとガの本義と使い分け」中京大学教養論叢、第23巻第3号p.8にあるもの。

テーゼ1「焦点は、すべての言明の意味の本質的な構成要素である」

を証明するために、ここでは「焦点の区別は、意味の論理的な区別である」を証明したい。焦点の区別が意味の論理的な区別であることを示せば、そのことは、焦点の区別が発話の意味にとって、付帯的なものではなく本質的なものであることの証明になるだろう。⁷

「sがpである」と「sはpである」の焦点の区別は、従来の論理学では無視されてきた。これはおそらく情緒的なニュアンスの差異の一部と考えられてきたためであろう。しかし、これは情緒的な意味ではなく、論理的な意味の区別である。たとえば、次のような三段論法を考えよう。

mはpである (大前提)

sはmである (小前提)

∴ sはpである。(結論)

これらの文の焦点を示せばどうなるだろうか。このままでは、どのようにでも焦点をつけられるように思える。ところが、この推論が、次のような問に対して答えるためのプロセスであると考えられる(これについては後で証明する) ときには、焦点は明確になる。たとえば、次のようになるだろう。

「sは何か？」

sは(他でもなく) mである (小前提)

mは(他でもなく) pである (大前提)

∴ sは(他でもなく) pである。(結論)

「sは何か？」という問の焦点は、「何か」の部分にある。そして、その答が何であれ、答の発話でも、「何」にあたる部分、つまり述語の部分に焦点があたるだろう。そこで、結論「sはpである」では「pである」に焦点があたることになる。「sは何か」と問われて、まず「sはmである」と考えたとする、ここでは、sは既知情報なので、新情報である「m」に焦点があたることになるだろう。これに続いて、次に「mは、pである」と考えたとする、ここでは「m」は既知情報になっており、「p」が新情報なので、「p」に焦点があたることになるだろう。そして、次に結論が導出されることになるだろう。ここで、大前提と小前提の順序が逆になることはないと思われる。なぜなら、「sは何か」と問われて、次に「s」が登場しない「mはpである」が思い浮かぶということは、不自然だからである。これに対して、次の問いに対して三段論法が行われるときには、焦点と前提の順序は変化するだろう。

「何がpか？」

(他でもなく) mがpである (大前提)

(他でもなく) sがmである (小前提)

ゆえに、(他でもなく) sがpである (結論)

この問答では、問いの「何が」に焦点があり、それゆえに、答である結論では、「s」に焦点がなければならぬ。「何がpか」と問われて、「mがpである」と思いつくときには、新情報である「m」に焦点があた

⁷ チョムスキーは、焦点と前提の区別は、深層構造によっては、規定されていないと考えるが、「は」と「が」の区別もまた、深層構造によって規定されていないようにおもわれる。(参考、池学鎮「「は」と「が」を持つ文の二重の主語について」語学教育研究論争、第6号、pp.10-28)

ところで、焦点-前提の構造が文の意味構造上、重要であるとすれば、それは、何らかの構文論上の区別になって現れるはずである。しかし、そうではないとすると、焦点-前提の構造は、文の意味構造上重要なものではなくて、いわば付帯的な意味であるとみなされるかもしれない。しかし、もし焦点-前提構造が、構文論上の区別になって現れるとすると、焦点-前提の構造は、コミュニケーションや問答を離れて、一つの文をそれだけ取り出したときにも確定しており、コミュニケーションに依存しないことになる。そうすると、新情報/旧情報の区別は、コンテキストに依存するので、焦点-前提の構造と、新情報/旧情報の区別が対応しなくなる。新情報に、焦点を合わせるためには、焦点は、深層構造によって規定されるわけにはいかない、ということになるだろう。(日本語の「は」と「が」は焦点位置を決定するのではなくて、限定するだけであるから、この説明とは矛盾しないだろう。)

るだろう。つぎに「sがmである」と考えるときには、「m」は旧情報になっており、新情報である「s」に焦点があたるだろう。そして次に結論が導出されることになるだろう。

このようにして、焦点の区別を考慮して、はじめて推論プロセスが明確になること（少なくともそのような場合が存在すること）が解る。したがって、推論を構成しているこれらの文の焦点は、情緒的な意味をもつのではなくて論理的な意味を持つと言えるだろう。我々の文の発話がつねに推論関係の中にあるとすれば、文が焦点を持つことは、文が有意味であるための条件である。したがって、われわれは、次のテーゼを証明する必要がある。

テーゼ「文の意味は、推論関係の中でのみ理解されうる」。

これについては「推論主義意味論」の主張として後述する。

(注) 予想される反論への応答

我々が推論を行なうときの思考のプロセスを説明するには、焦点の区別が重要な働きをなしている。しかし、それは<思考のプロセスとしての推論>について言えることであり、<命題の論理的関係としての推論>について言えることではない。例えば、命題の論理的関係としての<妥当な推論>とは、<前提が真であるならば、結論が真である推論>ということである。

これに対しては、次のように応えたい。<命題の論理関係としての推論>が、だれにも考えられていなくても存在するプラトニックは存在として考えられているのならば、そのようなものはないと言いたい。命題の論理的関係としての推論は、つねに誰かによって考えられ、理解されている。

4、テーゼ2の証明

ここでは、テーゼ2「焦点の位置は、問答関係によってのみ確定可能である」を証明したい。焦点の位置が、最もはっきりするのは、つぎのような問答関係においてである。

「何がpか」 「(他でもなく) sが、pである」

「sは何か」 「sは、(他でもなく) pである」

焦点の位置や意味は、その命題がどのような補足疑問文 (wh 疑問文) の答えであるかを知ることによって明確にすることができる。このことは、主張型発話が返答となる問答に限らない。行為指示型 (命令、依頼など) の発話の焦点もまた、次のように問答において明確になる。

「どれを捨てるのですか」 「(それではなくて) これを捨てなさい」

「これをどうするのですか」 「これを (しまっておくのではなくて) すてなさい。」

行為拘束型 (約束) の発話の焦点も、次のように問答において明確になる。

「誰か走ってくれますか」 「私が走ります」

「あなたはなにをしますのですか」 「私は走ります」

したがって、我々は、「ある発話がどのような補足疑問に対する答えであるかを理解できるならば、その発話の焦点を理解でき、また逆に、ある発話の焦点を理解できるときには、それを答とする補足疑問を立てることができる」と主張することはできるだろう。

しかし、これだけでは、まだ「焦点は、問答関係によって<のみ>確定可能である」ということの証明にはならない。この<のみ>を証明するにはどうすればよいだろうか。

(1) テーゼ2の証明1

一つの手がかりは、焦点は、文のある構成要素のパラダイム関係に注目することである。<文のシンタクスのある構成要素が焦点をもつとは、シンタクス上のその構成要素の値 (内容) が、「他でもなく、〇〇である」ということに注目するのであり、そのような構成要素の値への注目への促しは、その値についての補足疑問を問うことに他ならない>と言えれば、上の<のみ>を証明できたことになるだろう。

スペルベル&ウィルソンは、「陳述は関連性のある疑問を呼び起こすことがよくある。例えば、もし私が

あなたに私は不幸せだと言え、ほとんど確実にどうしてなんだろうという疑問をあなたにおこさせるであろう」と指摘し、これとどうように、発話の理解の途中において、聞き手には関連性のある疑問が生じて、それに答えるというやり方で、発話の理解が進むのかもしれない、と述べている。

彼らが挙げている例を少し簡略にして紹介しよう。⁸ (注14)

Jenniferr confessed to STEALING. (ジェニファーは盗みを認めた)

という発話において、聞き手は"Jennifer"を聞き、名詞句(NP)という統語範ちゅうを付与するとすぐに動詞句(VP)がづづくと考えつぎによる予想仮説を立てる。

Jennifer did somthing. (ジェニファーは何かをした)

これは、聞き手に次のような疑問を起こさせる。

What did Jennifer do? (ジェニファーは何をしたんだろう)

次に聞き手が"admitted"を聞くと、名詞句(NP)が続くと考え、次のような予想仮説を立てる。

Jennifer confessed something. (ジェニファーは、何かを白状した)

これは、聞き手に次のような疑問を起こさせる。

What did Jennifer confess to? (ジェニファーは、何を白状したんだろう)

そうして、これに対する答えとして盗みに焦点のあつた発話の理解が成立する。

Jennifer confessed to STEALING.

もちろん、このような問答は、実際に行われているとしても、ごく短い時間で行われることになり、意識されないだろう。ただし、スペルベル&ウィルソンは、発話の理解がこのようなプロセスで成立する、可能性を指摘しているだけであり、つねにこのようなプロセスが生じていると証明しているのではない。

ある焦点を理解することは、ある値をパラダイム関係の中からの選択の結果として意識することなのである。ところで、このような選択は、「なに」や「どれ」への答えとして「他でもなく、これを」というように返答することとして<のみ>可能なのではないだろうか(今のところ、私には他の可能性が思いつかない)。もし選択がこのようにしてしか行われぬのだとすると、焦点の理解は、問答関係によって<のみ>可能である、と言えるだろう。

(2) テーゼ2の証明2

ここでテーゼ2「焦点位置は、問答の関係によってのみ決定されうる」を別の仕方で証明したい。

① 同一の文が、異なる文脈において異なった焦点位置を持ちうる。

これは、これまでの例で示したとおりである。ここから次のことが言える。

② 焦点は、ある文脈での発話において成立しており、意味論的な規約によって決定された内容に属しているものではない。焦点の位置は、文脈の中でのみ決定可能である。

③ 問答関係の中で焦点は明確になる。

同一の文が、異なる質問に対する答えとしても使用されることが出来る。相関質問が異なる時、答えとしての発話は、多くの場合異なる焦点位置を持つ。我々はこのことを次の例で示すことが出来る。

Q1: 文学部はこの種の入試をするのですか?

A1: 文学部は、この種の入試をしません。

Q2: どの学部が、この種の入試をするのですか?

A2: 文学部はこの種の入試をしません。

Q3: 文学部は、この種類の入試をするのですか?

A3: 文学部は、この種の入試をしません。

もし我々がどの部分に焦点をおくのかを決めて、その部分の内容を尋ねる質問をするならば、我々は、(一語文を除く)すべての文から、このような多くの例を上げることが出来る。(一語文を除くのは、一語文の

⁸ スペルベル&ウィルソン『関連性理論』内田聖二、中むつ俊明、宗南先、田中圭子訳、 研究社、pp.251-254。

場合には、焦点はその語にしかないからである。)しかし、我々が冗長性を避けて、焦点を持つ部分だけを話そうとする傾向をもつので、実際の返答はつぎのようになる。

Q1: 文学部はこの種の入試をするのですか

A1: そうではありません。

Q2: どの学部が、この種の入試をするのですか?

A2: 文学部です。

Q3: 文学部はどんな種類の入試をするのですか?

A3: この種の入試です。

しばしば一語文になる大変短く省略された返答の場合には、我々は他の焦点位置をもたない。しかし、そのことは、焦点位置が問答関係から無関係であることを示しているのではなく、逆に、焦点位置を理解することが問答関係に依存していることを示している。

これは、主張型発話を答えとする質問の場合に限らない。命令や依頼のような行為指示型発話の焦点もまたそれを答えとして要求する問との関係において明らかになる。

Q4: あなたが片付けたいのはどれですか?

A4: (他でもなく)これを片付けてください。

Q5: あなたは、これをどうしたいのですか?

A5: これを(他でもなく)片付けてください。

約束のような行為拘束型発話の焦点もまた、それを答えとする問いとの関係においてあきらかになる。

Q6: 誰が我々のために走ってくれるのですか?

A6: (他でもなく)私が走ります。

Q7: あなたは我々のために何をしてくれますか?

A7: 私は(他でもなく)走ります。

我々は、表現型や宣言型の発話についても例をあげることができるだろう。

以上の証明1と証明2では、おそらくまだ「焦点は、問答関係によって<のみ>確定可能である」ということの厳密な証明にはなっていないだろう。では<のみ>を証明するにはどうすればよいだろうか。

①推論は、問答関係の中でのみ可能になる。

②言明の意味は、推論の中でのみ確定する。

∴③言明の焦点の位置は、推論の中で確定する。

という仕方で証明できるが、しかしこの場合、①と②だけから CT が証明できるので、③は不要であることになる。①②③CTの間には、様々な前提帰結関係が可能である。全体として整合的な関係を作っている。